

熱田今昔

熱田楊貴妃伝説（熱田神宮）

熱田図書館

クレオパトラ、小野小町と並ぶ世界三大美女の一人楊貴妃。
 唐の皇帝玄宗が寵愛し過ぎて国が乱れたため、「傾国の
 美女」と呼ばれています。その楊貴妃の伝説が、熱田に残っ
 ています。

それは奈良時代、唐の最盛期。玄宗皇帝に日本侵略の野
 心ありと見てとった日本の神々が評議して、熱田大神を唐
 に送り込みました。それが楊貴妃だったという伝説です。

七一九年、楊家の女に生まれ変わった熱田大神は、貴妃と
 なって絶世の美貌で玄宗を放蕩なさしめ、日本侵略を忘れ
 させます。挙句、臣下の裏切りによる「安史の乱」が起こ
 り、七五六年、楊貴妃自身も長安の西約九〇キロの馬嵬で
 命を落とします。唐は衰え、足かけ三八年に及ぶ勤めを果た
 した熱田大神は、船で宇津海浦に着き、熱田に戻りました。

玄宗は、乱が納まり皇帝を退位した後も、楊貴妃をどうし
 ても忘れられません。三千世界を自在に行き来できる力を持
 つ方士 楊通幽に、楊貴妃探しを依頼します。方士は、東の
 海に浮かぶ蓬萊の島に太真という美しい仙女が住むとの
 噂を聞き、蓬萊である熱田社を訪ねて来ます。そして
 春敲門を叩き、太真殿に眠る太真を起こしてもらいます。

その美貌を見て楊貴妃と確信した方士は、玄宗が会いたがっているので唐へ戻って欲しいと頼みます。しかし、彼女は断ります。そのかわり会った証拠に、かんざしと香箱の蓋を折り壊した夫々の片割れと、忘れもしない七五五年七月七日の夜、玄宗と楊貴妃が長生殿で誓い合った、二人だけが知る「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」という言葉を、方士に託したのです。

方士の報告を受けた玄宗は、「間違いない」と言って飛車で熱田に駆けつけ、八剣明神として現れたということです。

今、熱田神宮神楽殿の東を百メートル程北へ行くと、清水社裏に、清水が湧く場所があります。その水は平安の頃、景清の眼病を治し、美肌効果もある霊水とされています。湧水口近くの石畳の清流の真ん中には、柄杓で三度水をかけると願いが叶うという苔むした石が突き出ています。これが、楊貴妃の墓だった石塔の残骸と言われている石です。

楊貴妃伝説の背景には、古来、熱田が「蓬が島」、「蓬莱島」と呼ばれてきた伝説があります。神宮が巨大な亀の背に載っているという伝説で、中国の東の海上に霊亀の背に載った蓬莱山があり、仙人仙女が住むという中国神話が結びついてきます。一方、唐の白居易が楊貴妃と玄宗の物語を詠んだ

ちようごんか

「長恨歌」。そこに、楊貴妃が死後に住んだ場所として登場する蓬萊宮ほうらいきゆうが熱田社あつたのやしろだとする記述が、鎌倉時代に書かれた

『溪嵐拾葉集』けいらんしゆつようしゆう⑱きじゆうにあり、これが熱田の楊貴妃伝説の起源きげん

とされています。鎌倉時代は元寇げいこうがあり、外患への憂慮ゆうりよが高

まった時代ですが、さらに熱田大神が外患を防ぐため楊貴妃あつたのおおかみ

になったとするのは、室町中期の『雲州樋河上天淵記』むろまちちゆうき

の記述が最初とされています。うんしゆう ひのかわかみ あめがふちのき⑲

熱田楊貴妃伝説は、以後も庶民に根付き、黒船の来航したねづ くるふね ろうこう

江戸時代後期には、こんな川柳もつくられました。せんりゆう

楊貴妃はもと神州しんしゆうのまわし者

日本を攻めなさるせなと貴妃は言いきひ

やまとことばはおくびにも貴妃出さずきひだ

玄宗は尾張ことばにたらされる

三千のさんぜん一は熱田へいち遷宮せんくう

【注①～⑲】

① 楊貴妃…七一九年～七五六年。本名楊玉環。七四〇年二一歳で玄宗に見出されるが、当時玄宗の一八

男寿王李瑁(りぼう)の妃だったため、一度道教の女道士楊太真として出家後、還俗して後宮(中国

の大奥)に入る。貴妃は皇后に次ぐ位だが、当時玄宗に皇后がなく実質No.1。七五六年「安史の乱」で

避難の際、馬嵬で臣下が反旗を翻したのを納めるため玄宗の命で宦官(かんがん)後宮に入れる去勢官吏

高力士に縊死させられ、仮埋葬される。しかし七年後、玄宗が改葬を命じると、遺体は無く匂い袋だ

けが出てきたため、楊貴妃生存説、日本渡来説(山口県長門市二尊院)が生まれた。

② 唐…六一八年～九〇七年。日本では飛鳥時代から平安時代中期。多くの遣唐使が派遣された。

③ 玄宗…六八五年～七六二年。唐の六代(数え方で九代)皇帝。在位七十二年～七五六年。七一三年～七四一

年が唐の最盛期「開元の治」。楊貴妃を見出した後放蕩が始まる。楊貴妃の血縁で出世した楊国忠と、楊

貴妃に取り入り節度使(国境警備将)となった安祿山が衝突した「安史の乱」が起き、楊貴妃を失い退位する。

④ 熱田大神…草薙剣が御霊代の天照大神。但し、日本武尊説も有力。熱田明神は熱田大神の顕在化。

⑤ 安史の乱…七五五年～七六三年。玄宗臣下の安祿山と史思明が起こしたため、二人の名がつく。

⑥ 宇津海浦…知多郡の内海岸。なお、船路帰還説と即時帰還説がある。

- ⑦方士(ほうじ・ほうし)：道士と同義。道教の行者。楊通幽の名は五代時代の杜光庭著『仙伝拾遺』による。
- ⑧太真：楊貴妃の女道士時代の名(長恨歌)。「仙伝拾遺」は内天神(祭神少彦名命)に楊貴妃を祭るとする。
- ⑨春敲門：空襲で焼失したかつての熱田神宮東門。春に玄宗の使いが戸を叩(敲)いたのが由来とする説(『尾張名所図会』)があり、当時「玉妃太真院」の扁額が掛かっていたとされる(『楊太真外伝』『名古屋豆本蓬萊楊貴妃』)。元は現熱田神宮会館西にあり、大正一三(一九二四)年と昭和一三(一九三七)年の二度移転。現神宮東門に落ち着く。昭和に左右の小門増築。伝小野道風筆の「春敲門」扁額が現存。
- ⑩長生殿：長安(現西安)郊外の離宮華清宮(旧温泉宮)にあった建物。華清宮は楊貴妃入浴の華清池が有名。
- ⑪比翼鳥・連理枝：長恨歌の一節。仲の良さの象徴。「比翼の鳥」は、雄雌合体した鳥。それぞれ目と翼が一つずつあり、一体になって飛ぶ。「連理の枝」は、根元が別々の二本の木の、枝や幹が合体したものの。
- ⑫八劍明神：別社八劍宮(はっけんぐう 祭神本殿と同じ七〇八年創建)。玄宗が、天翔ける「飛車」に乗り、熱田に八劍明神として現れたとするのは、『曾我物語 卷二』『玄宗皇帝の事』。
- ⑬景清：藤原景清。生年不詳一一九七年没? 平家の武将として源平の戦いに参戦し、平景清とも呼ばれる。歌舞伎十八番で剛力振りが演じられる。神戸町の景清社、清雪門付近と、古渡に屋敷があったとされる。所持した名刀疋丸は、持つ者が眼病を患うと言われ、丹羽長秀が熱田神宮に奉納した(『信長公記』)。謡曲「景清」は、熱田の遊女との間にもうけた娘の人丸が、日向に流された盲目の父景清を訪ねる話。
- ⑭楊貴妃の墓：貞享三(一六八六)年の大修理で、石塔と塔婆が廃絶された。但し、清水社の北に明治の頃まで遺蹟らしきものがあつたとの伝承がある(『熱田風土記七卷』『放談楊貴妃伝説』市橋鐸著)。
- ⑮蓬萊島：熱田蓬萊説は、貞応二年(一二三三年)成立と見られる作者不詳の紀行文『海道記』に記される。
- ⑯白居易：七二二年〜八四六年。中唐の詩人。字は樂天。長恨歌は楊貴妃死後五〇年後の作。
- ⑰『溪嵐拾葉集』：比叡山の光宗が一三一年から四八年にかけて集録した百科全書。正和二(一三二五)年の記述で、蓬萊は熱田神宮で(巻六)、楊貴妃が熱田明神だと述べる(巻一〇八)。
- ⑱元寇：一二七四年文永の役、一二八一年弘安の役。モンゴル帝国の元が九州北部に襲撃。
- ⑲『雲州樋河上天淵記』：大永三(一五三三)年刊の日本神話集。作者不詳。『群書類従 二輯 神祇部』所収。
- ⑳神州：神州。日本のこと(『古事記』『日本書紀』)。江戸末期の川柳らしく、本居宣長等の国学思想が反映。
- ㉑三千・遷宮：長恨歌の一節「後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」を踏まえ、後宮の三千人の美女の一人、楊貴妃が熱田の宮に戻ったのを洒落て、後宮から宮への遷宮と詠んだ。

【主な参考文献】

- 『尾張名所図会 上巻』岡田啓編 一九一九年(愛知県郷土資料刊行会一九七三年再復刻)
- 『尾張名所図会 附録』岡田啓著 名古屋温古会 一九三〇年(愛知県郷土資料刊行会一九七一年復刻)
- 『幻の草薙剣と楊貴妃伝説』長谷川修著 六興出版 一九七七年
- 『熱田神宮』篠田康雄著 学生社 一九六八年
- 『熱田歴史散歩』日下英之著 風媒社 一九九九年
- 『楊貴妃漂着伝説の謎』加藤蕙著 自由国民社 一九八七年
- 『名古屋豆本 第三六集 限定版 蓬萊楊貴妃』真鶴亭衣浦真生著 亀山巖 一九七四年
- 『熱田神宮史料「第六」地誌編』熱田神宮々々庁編纂 熱田神宮々々庁二〇一五年
- 『白楽天詩選 上(岩波文庫)』白楽天著 川合康三訳注 岩波書店 二〇一一年
- 『日本古典文学大系 八八 曾我物語』岩波書店 一九六六年
- 『熱田神宮参拝のしをり』熱田神宮々々庁監修 日進堂書店 一九三七年



『尾張名所図会』より



清水社裏の楊貴妃墓石の痕跡



春敲門(小門増設前)
昭和2年『熱田神宮』より